





【プロフィール】

渡邊 義孝(わたなべ・よしとか)
1966年生まれ。一級建築士、尾道市立大学非常勤講師。保線工、型枠工などを経て「アユミギャラリー・鈴木喜一建築計画工房」入所。2004年独立。住宅設計の他、民家再生、文化財調査などに従事。NPO法人「尾道空き家再生プロジェクト」理事。著書に「臺灣日式建築紀行」(時報出版/台湾)、「風をたべた日々」(日経BP社)、共著に「深刻化する『空き家』問題」(日弁連)ほか多数。



NPO尾道空き家再生プロジェクト

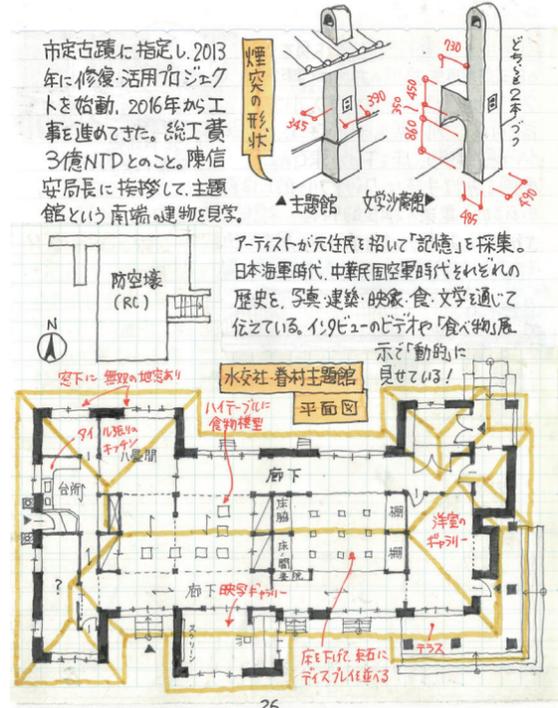
私は10年ほどで鈴木先生の事務所から独立しました。が、建築物の再生はライフワークとして続けています。私は現在、広島県尾道市内のNPO法人「尾道空き家再生プロジェクト」にも理事として参加しています。この団体は2007年に設立され、明治から昭和初期の良質な建物がたくさん残されている尾道の空き家を再生し、移住希望者を見出し、住みやすいように修繕して住んでいただく事業を行っています。空き家バンクの予算は尾道市が負担しています。このような仕事は、建築学科のない尾道市立大学で非常勤講師として建築学を教えることになりました。学生には再生した尾道市内の建築物などを見せ、フィールドワークの大切さも教えています。

2019年に単行本の『臺灣日式建築紀行』を日本ではなく台湾で出版されましたが、その経緯について。2011年、日本で「東アジア日式住宅研究会」が結成され、そのフィールドワークの一環で、初めて台湾を訪れました。台湾建築の知識はあまりなかったものの、現地で見えた日本統治

台湾の日本式建築に大きな関心



水交社 SHUEI JIAO SHE Cultural Park 25

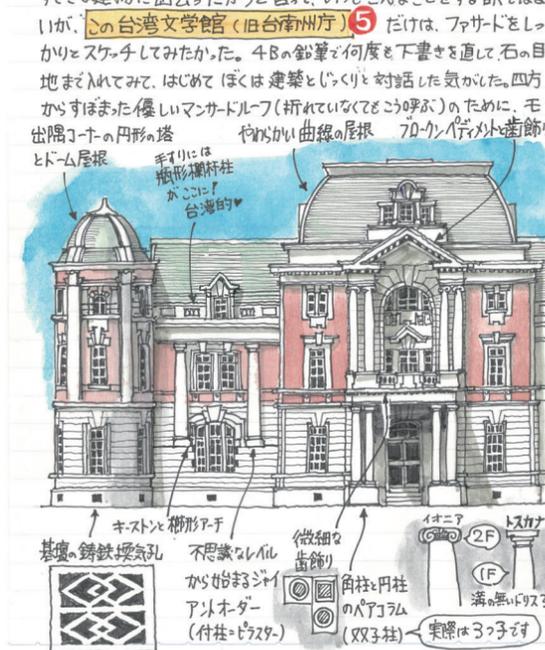


26

時代の建築物、現地でいう「日式建築」に大きな関心を持ちました。写真や録音などのほか、ノートにはスケッチも添え、見聞した

となども書き記しました。これまで、台湾は18回訪れています。私はもともと、紛争地域とその土地の民俗に強い関心を持っていたの

で、台湾だけでなく、世界各地でスケッチの記録を残しています。2019年に出版した『臺灣日式建築紀行』は日本語の原稿を翻訳したのですが、日本語による日本語版は出版されていません。また、現在も台湾で2冊の本の出版作業が進んでいます。



現在、台湾社会では「日式建築」を守ろうという風潮が広がっている。渡邊さんのノートは、台湾で『臺灣日式建築紀行』として出版され、戦後台湾において長く忘れられた日本式建築の美しさを多くの方に気付かせるきっかけを作っている。上の4点のスケッチは、台湾西南部の台南市を訪れた時のもの(渡邊義孝さん提供)

國立台湾文學館 National Museum of Taiwan Literature. 1909年 廢棄置庁、台南庁誕生... 1913年 上棟... 1916年 台南庁庁舎として竣工... 1920年 廢庁置州により台南州に以降台南州庁舎として使用... 1945年 台南空襲で破産... 1949年~ 中華民國空軍供役司令部... 1969年~1997年 台南市政府... 1997年 文化資産保存研究中心... 2002年 修復完了、2003年 文學館

建築物の9割は、いわゆる「新築」です。残る部分の一握りが再生とリノベーションです。しかし、歯科医師との共通点から見ると、リフォームや再生というマイノリティ(minority)の部分が多さに共通点になると思います。つまり、建築物の場合、建物の一部が痛んでいる、雨漏りがある、耐震性が弱い、家族が増え

歯も痛んでからの修繕は大変「日常的な付き合い」が大切。渡邊先生が考える歯科と建築の共通点をお聞かせください。建築物の9割は、いわゆる「新築」です。残る部分の一握りが再生とリノベーションです。しかし、歯科医師との共通点から見ると、リフォームや再生というマイノリティ(minority)の部分が多さに共通点になると思います。つまり、建築物の場合、建物の一部が痛んでいる、雨漏りがある、耐震性が弱い、家族が増え

新型コロナウイルスの蔓延で、人々が自宅を過ごす時間が長くなるなど、住まい方にも変化が生じています。これからの住まい方についてのお考えを。長くなった自宅を過ごす時間が増えるのは、テレワークなどの仕事の時間です。つまり、自宅でクリエイティブな作業ができる環境が必要です。私は「緊張感」もデザインの中に必要だと思っています。自宅とはいえ、仕事に向き合うためには安らぎだけでは不十分で、ちょっと背筋を正すような雰囲気もほしいなと思っています。最後に、大切にされている言葉を紹介します。『更上一層楼(こうじょう)』という詩(こうじょう)です。中国の詩人 王之涣(わんじかん)が詠んだ漢詩「登鸛鵲樓(かんじやくろくにのぼる)」の一節で、鈴木先生のアトリエの階段に掛かっていた言葉です。その意は、「遠くまで見渡すなら、もっと上で見渡す必要がある。物事を広く見渡すには、努力して自分を向上させる必要があり、向上すれば広い視野で周りを見渡すことができるようになる」というもの

インタビューについてのご感想は、info@tokyo-sk.comへお寄せください。過去のインタビューは当協会HPからご覧いただけます。